

移民国家構想に国運をかけるしかない

行政官時代、在日朝鮮人の処遇問題(1975年)に始まり、中国人偽装難民事件(1989年)、フィリピン女性の人身売買事件(1995年)、北朝鮮残留日本人妻の帰国問題(2002年)、人口減少社会の日本の移民政策のあり方(2004年)など、出入国管理行政上の難問と取り組んだ。法務省を退職した後は移民政策研究所を設立。人口秩序の崩壊という日本史上最大の危機に見舞われた日本を救うべく移民国家ビジョンの構築に全力を傾けた。

これらの問題の多くは、私の問題提起を受けて大論争に発展した。40年間、移民政策に関する理論構築と理論の実践を積み上げた努力が実を結び、誰もが不可能と考えていた移民鎖国体制をくつがえすことができた。未踏の原野を突き進めば必ず視界が開けるといふ見本だ。

今わたしは、移民政策のプロフェッショナルの立場から、世界の模範となる移民国家の樹立を国家・国民に迫っている。移民国家ニッポンが国家存亡の危機を克服し、移民受け入れのモデル国として世界に君臨する時代を視野に入れている。

わたしが著作・論文で発表した日本型移民政策の提言は国民から長年無視されてきた。日本の歴史はじまって以来の革命的な移民政策を提唱しているのだからそれは当然のことだ。

一方、私の政策提言に対して違和感を覚えた日本人は多数いると想像するが、なぜか理論的反対論も感情的反発も散発的であった。袋だたきにあうと予想していたが、正直、拍子抜けの感がしないでもない。移民問題に詳しい専門家がいなかったことが一因だと思うが、最近ではヘイトスピーチ団体など移民反対派は鳴りを潜めており、今後移民反対運動が盛り上がることはないと思っている。

2007年2月、1000年以上続く移民鎖国体制を打破しようと決心し、思い切って「移民50年間1000万人構想」を朝日新聞に発表した。すると、移民賛成の意見もなかったが、そうかといって移民反対の声も出なかった。完全に黙殺された形だが、それが幸いした。坂中構想は無傷のまま生き残った。

いま、その大構想がダイナミックに動きだした。たとえば、内閣府は2014年2月、100年後の日本が1億の人口を維持するための未来構想——「移民100年間2000万人構想」を公表した。本年3月、英国BBC放送は坂中移民国家構想を世界に紹介した。

国民の間から移民反対の声が出ない状況がはっきりすれば奇跡が起きるかもしれない。国民からあまり歓迎されない移民政策が、ほかに人口危機の日本を救う方法が見つからな

いという理由で、日本のとるべき百年の計として独り歩きし、国の基本方針に発展する可能性がある。最近の移民政策をめぐる情勢の急展開に鑑みると、ミスターイミグレーションが立てた移民国家構想に国運をかけるしかないというコンセンサスが政府部内で形成されることもあり得ると考えている。

#### 鬼の坂中の移民1000万人構想

法務省入国管理局の役人時代、私は不法外国人や外国人を食べ物にするブローカーなどから「鬼の坂中」とおそれられていたという話だ。異論はない。公正な出入国管理を行うことを定めた入管法に基づき、不法入国者や不法滞在者に対して厳正な処分を行ったのは事実である。

そんな入国管理一辺倒の人間がいきなり1000万人の移民の受け入れを言い出したのだから驚かれた人もいると思う。いっぽう、出入国管理秩序を守るため厳格な入国管理を実施した元入管職員の政策提言ということで、政府部内において信頼できる移民政策だと真剣に受け止められた面もあるようだ。

「入管のプロが言うのだから信用できる」「教育重視の移民政策をとれば成功する」といった感想が寄せられている。

来るべき大量移民時代の日本は、移民受け入れ計画に従って正門から入る移民を温かく迎える一方で、テロリストや不法移民など裏門から潜り込もうとする外国人を厳しく取り締まらなければならない。

入管問題に携わった元行政官としていちばん気がかりな点は、巨大な人口と経済を背景に就労人口を押し出してくる中国の存在である。古巣の入管にお願いがある。中国人の不法入国問題に組織を挙げて対処してほしい。

出入国管理が十分機能しなければ、移民政策に対する国民の理解も協力も得られない。万一、日本人の外国人像がテロや犯罪や不法就労といった負の要素と結びつけば、移民の受け入れは頓挫してしまう。日本人と外国人が共生する社会も実現できない。

国民の外国人イメージを悪化させないためにも、不法外国人の入国・在留を許してはならない。

出入国管理の関係部署がよく職責をはたし、人材育成型移民政策による移民の受け入れが順調に進めば、「好ましい外国人が大多数で問題のある外国人が少数」というあたりで国民の外国人観は落ち着くであろう。そうなれば、「世界の多彩な顔ぶれがそろった多民族社会はおもしろい」という国民合意が形成される日も遠くないだろう。

#### 坂中論文から40年——移民政策研究一筋の道

よわいを重ねると人生を振り返ることが多くなる。70の年になると自分の歩んだ軌跡

が客観的に見れる。これまで書いた政策論文においても世界観や行動美学などを率直に語っている。わたしは自分の書いた文章で自分の行動を縛ることを旨として生きてきた。坂中流の言行一致の生き方である。

1975年の坂中論文から40年、いつのまにか20冊を超える著書を出版した。こういう役人は日本では前代未聞なのかもしれない。移民政策研究一路をたどり、ここに移民国家理論体系の完成に至った。各方面からたたかればなっしの職業人生であったが、政策論文ひとすじで日本の未来の創造に挑んだ人生を誇りに思う。

処女作の『今後の出入国管理行政のあり方について』で入管政策論の金字塔を打ち立てたことが縁となって移民政策一本の人生行路を歩むことになった。一本の政策論文がひとりの日本人の運命を決めることがあるのだ。幸運に恵まれれば日本の歴史を動かすことができるのだ。

1975年2月、法務省入国管理局が、「今後の出入国管理行政のあり方について」という課題で職員から論文を募集した。この年、出入国管理行政発足25周年を迎えることを記念して行われた行事の一環だった。

この論文募集に若輩の私も応募した。そして、審査の結果、私の書いた論文が優秀作に選ばれた。記念論文の審査委員長を務めた竹村照雄氏(当時法務省入国管理局次長)の選評が私の手元にある。身に余る評価をいただいた。その時、私の進む道は決まった。

〈第一部優秀作の坂中論文は、その視点において、その構想において、その論証において、まことに見事なものであり、「二十五周年記念」とするに全くふさわしい内容というべきであった。審査員全員が一致してこれを優秀作に推したのである。出入国管理行政を世界史的な変化発展の中で位置づけ、外国人の人権保障への明確な意識と国益との調和を目指して将来を展望し、しかもいたずらに理想に走ることなく、絶えず足下現実の問題に即し、これに立ち返りつつ議論を進める態度は、その考察の基礎となっている資料の豊富さとともに、力強く迫るものがあった。〉

当時を振り返ると、私は運がよかったのだと思う。上司のなかに竹村照雄氏のように高い見識と鋭い問題意識を持つ人物がおられたのだ。坂中論文は最高の行政官に見いだされて無事誕生した。しかし、その後の歩みは、順風満帆というわけにはいかなかった。世間の猛烈な荒波にもまれる波瀾万丈の未来が待っていた。

1977年に竹村氏のすすめで論文が公にされるや、在日韓国・朝鮮人問題を考えるうえでの古典的文献と評価される一方で、20年近く研究者や活動家の間で賛否両論の激論が闘わされることになった。

坂中論文で述べた私の考えは、執筆から40年がすぎたいまも、基本的に変っていない。論文で提案した政策提言は次々と実現した。わたしに残された最後の課題が世界の最高レベルをゆく移民国家の創立である。

古い先が短い私は坂中論文がたどった激動の歴史を回想することが多くなった。坂中論文と共にあった人生の幸せをかみしめている。幸運の星の下に生まれた坂中論文は天寿を全うし、いま劇的な一生を終えようとしている。

### 移民政策の本質に迫る

以下は、坂中論文の「国際間の人口移動」の章の総論部分をまとめたものである。若い頃に書いた未熟な論文であるが、わたしの移民政策論の原点となった思い出の文章である。その中に超少子化・超高齢化社会に入った日本の移民政策を検討するときのヒントが含まれているかもしれない。たとえば、「先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている」と、40年後の日本の姿を的確にとらえている。

移民国家をめぐる議論が本格化する中、40年前の論文が移民政策の本質を考える場合の参考になれば幸いである。

く人類の歴史を振り返ると、生存のため、あるいはより良い生活環境を求めて人が新しい土地に移り住む、地球規模での人の移動と定住の歴史であったと見ることができる。今日、人類は多くの民族と国民に別れて世界各地に住んでいるが、これらの民族や国民はすべて、より適した生活条件の土地を目指して移住してきた移民と、その子孫によって形成されたものである。人類は今後も、生活の糧を得るため、あるいは快適な生活を求めて、国内のみならず国境を越えて活発に移動し続けることであろう。

国際間の人口移動(移民)についていえば、地球上に人口分布と経済発展の不均衡が存在する限り、人口稠密で労働力過剰の国から人口希薄で労働力不足の国への人の移動は絶えないであろう。地球上に富の偏在が存在する限り、貧しい国から豊かな国への人の移動は不可避であろう。

世界の現状を観察すると、開発途上国における人口爆発と社会経済開発の停滞、先進国における人口革命と経済発展という顕著なコントラストが見られる。開発途上国においては、人口激増と貧困の悪循環が生じている。一方、先進国においては、豊かな社会が形成され、出生率と死亡率がともに低下し、少子高齢化社会を迎えている。そこでは、製造業、重化学工業等の基幹産業やサービス部門における労働力不足の問題が新たに生じている。

他方、移民とその末裔である国民は、いったん地域共同社会(国民社会)を作り上げ、あるいは社会の構成員としての地位が認められると、自分たちの獲得した利益を守ることが

第一義的な関心事となる。新たな移民の到来に対しては次第に閉鎖的な態度をとるようになり、ついには門を閉ざしてその移住を防止するに至る。このような入国管理体制は、それぞれの国民(現住者)のなわばり意識(移住希望者の国民共同体への加入を拒否する姿勢)を背景とした一種の縄張り体制と見ることができる。)

#### 日本型移民国家大綱が完成した

作家、学者、ジャーナリストなど文章を書くことをなりわいとする人は多数いる。彼らはプロの文筆家だ。

私は多くの論文、著書をものにしたが、元来はアマチュアの執筆者である。文章の修行などはしていない。必要に迫られ、かたっぱしから我流で文章を書いてきた。

入管時代、本業に専念しながら、ひまを盗んで、本来の職務の延長線上の仕事として外国人政策を考えるのを常とした。

深夜の時間帯に、『今後の出入国管理行政のあり方について』(1975年)を嚆矢とし、『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』(1999年)、『日本の外国人政策の構想』(2001年)、『入管戦記』(2005年)など、外国人行政に関係する政策論文を絶え間なく書き続けた。気がつくや政策論文の生産量は相当な枚数にのぼった。

およそ政策提言への挑戦は、核心をつく理論を構築しなければ、すぐに馬脚が現れ、世間の物笑いの種になる。それが的を射た理論であったかどうかは、そのうち事実が証明する。したがって政策論文を書く人にはぬきんでた構想力と先見の明が備わっていなければならない。さらに紙に書いたことは必ず実行する強い意志が求められる。

専門分野がなんでもあれ、政策の立案と実行が一番むずかしいことに変わりはない。国家国民に対して負う責任も重い。だから利口な政治家や官僚は触らぬ神にたたりなしをきめこんで国家政策には手をつけようとししないのだ。

平成の世に将来の国民のため火中の栗を拾う日本人はいないということか。ドンキホーテ型の無鉄砲なことをする日本人はいないということか。あるいは運命のいたずらなのか。とにかくにも、日本の未来構想を立てる大役は、移民政策一本の道を歩んだ坂中英徳に白羽の矢が立った。これは天命としか言いようがない。

行政官時代、前記の著作物を次々発表した。恐れを知らぬにもほどがあるが、いつのまにか政策論文の執筆が習性となった。2005年に法務省を退職した後は、移民政策研究所を根城に、日本オリジナルの移民国家構想を立てるため理論的研究に熱中した。

この10年間、移民政策に関する研究実績を積み上げ、『日本型移民国家の構想』(2009年)、『日本型移民国家の理念』(2010年)、『日本型移民国家への道』(2011年)、『人口崩壊と移民革命』(2012年)など一連の著作をやつぎばやに出版した。

そして、昨年10月に出た『新版 日本型移民国家への道』(東信堂、2014年)の刊行によって、坂中試案の日本型移民国家大綱が完成した。デビューから40年を経て、老

書生は移民政策分野のプロの書き手になった。

### 移民国家大論争を期待する

平成の日本は、世界の歴史にも例のない「人口崩壊」という国家的危機にある。国民の消滅につながる一大危機だ。未曾有の危機を乗り越えるのに生半可な改革をいくらやってもダメだ。今の日本に求められるのは国の形と国民の生き方を根本的に改めることだ。

千年に一回の革命を行う歴史的決断が国に求められる。各界各層が一丸となって人口危機に立ち向かう勇気が国民に求められる。

日本人が消えてゆく民族的危機に臨み、平成時代の日本人が移民鎖国の歴史を書き換えるのだ。国境の門を世界の若者に開放し、100年の時間をかけて人口ピラミッドを正常な形に立て直すのだ。それしか日本の生き残る道はない。

国民は、理想の移民国家の創建をめざして、移民鎖国時代に形成された島国根性を克服し、移民を正当に処遇する地球人に生まれ変わる必要がある。

究極の目標は人類未踏の人類共同体社会の樹立だ。それは言葉の真の意味での日本革命だ。当代の日本人が理想に向かって絶え間ない努力をすれば、後世の国民と移民に幸福をもたらす共生国家の基礎を築けるだろう。

1975年の坂中論文以来40年、移民政策の理論的研究に従事してきた努力の結晶が、移民革命の実行を国家・国民に迫った『新版 日本型移民国家への道』（2014年）である。この本の出版を機に移民国家大論争が起きることを期待する。

### 最後のミッションに不退転の決意で挑む

法務省入国管理局の役人時代に発表した論文の大半は政策を論じたものであった。外国人にかかる問題を発見し、具体的な解決策を提案した。加えて立法など政策の実現にも努めた。

問題提起と政策提言は正論と認められたのだろう。私が提案した外国人政策の多くは立法措置がとられ実現した。私の入管人生は、「問題発見」と「政策提言」と「政策実現」に代表される、文字通り役人冥利に尽きるものであった。

2005年3月に法務省を退職した直後、人口崩壊の危機を国家存亡にかかわる重大問題と受け止め、人口問題の根本的解決策は最大規模の移民受け入れ以外にないとのアイデアが固まった。そして同年8月、前述の外国人政策研究所（現在の一般社団法人移民政策研究所）を設立、移民国家に関する理論的研究に着手した。

移民政策関係の集大成の著書が前述の『新版 日本型移民国家への道』である。そして本年5月、英語版移民政策論集：『Japan as a Nation for Immigrants』を発刊した。この英文図書を使って世界の人々のいづく日本イメージを「世界に開かれた移民国家」に変え

たいと思う。

移民国家理論の完成で満足していない。ミスターイミグレーションの最後のミッションに不退転の決意で挑む。

司馬遼太郎は『竜馬がゆく』のなかで、坂本竜馬に、次のように言わせている。

〈仕事というものは、全部をやってはいけない。八分まででいい。八分までが困難の道である。あとの二分はたれでもできる。その二分は人にやらせて完成の功を譲ってしまう。それでなければ大事業というものはできない。〉

この言葉は今の私の心境を言い表している。私がライフワークとして取り組んでいる移民国家への道は八合目まで来たと思う。人口崩壊の問題の重大性を指摘し、その最有力の解決策である移民国家理論の完成を見た。私の理論構築の時代は終わった。

これからは世論と政治を動かす仕事に専念する。この二分の仕事は多士済々の人々の協力を得て成し遂げたい。

付言すると、この10年ほど四面楚歌の状況が続いているが、そうかといって永田町、霞ヶ関から坂中移民国家構想に対する批判は一切ない。なぜか日本政府は霞ヶ関OBの異端者が提唱する移民革命思想に寛大である。自由に泳がせているということなのだろう。

昨年秋、内閣、霞ヶ関の中枢幹部たちと個別に会って、前記2014年10月に出版した著書を持参のうえ、今後の移民政策のすすめ方について話し合った。官僚の世界で移民問題はもはやタブーでなくなったと実感した。私の信頼する官僚たちは、「坂中さんの移民国家構想に賛成。組織を動かす」と決意を語った。官僚機構から組織として移民賛成の声はまだ上がっていないが、憂国の心のある官僚たちの間で坂中構想を支持する声が高まっていると肌で感じる。